HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	9. 「かまモン化」の実践に向けて ： 多様性と可能性を語る「学部紹介」を
Author(s)	鎗水, 孝太
Description	第2部: 可能性と多様性を提示するピア・サポート
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）p.111-113
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49504
Type	report
File Information	09.yarimizu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

９.「かまモン化」の実践に向けて

―多様性と可能性を語る「学部紹介」を

鎗水孝太[1]

１．はじめに―背景と目的―

本活動は、本報告書第２章において述べられている「かまモン化」の理念に対する実践である。

もちろんこの企画の背景にあるのは、今年度より北海道大学において導入された総合入試制度とそれに伴うこれまで以上の新入生の動揺や不安である。総合入試制度については、第２章においても触れられているように、約 2600 人の一年生の約 45 パーセントが学部未決定のまま受験、入学し[2]、2 年進級時に改めて各学部に振り分けられる、というシステムである。特に半数以上を総合入試による学生が占める理系学部生にとっては、一年生の期間はこれまで以上に大学生活の中で重要なものとなっている。

そのような状況の中で企画されたのが、この「学部紹介」イベントであった。もともと本企画は、北海道大学ピア・サポートメンバーの厨川によって立案されたイベントである。そこで想定されていた内容・目的は、各学部がオフィシャルに製作したパフレット等にはのらない先輩しか知らないような学生生活に関する情報[3]を一年生に提示することで、その学部選択[4]に資することであった。しかしながら「かまモン化」への議論がより深まるに及び、より広範な学生生活の情報を一年生に提供できないか、ということになった。それは例えば、

～学科は実験などで忙しいと聞くが、サークル・部活も続けたい。両立はできるだろうか？
～研究室は夜までゼミなどがあるようだが、アルバイト等はできるだろうか？

といったような相談が多数寄せられていたからである。

このような疑問・悩みに対して、学生の立場として、これまでの諸先輩たちが、それぞれの学生生活をどのように過ごし、いかにして学業・研究やその他さまざまな生活要素―サークル・部活をはじめとしてアルバイトやボランティアといった学外の活動、そして学生時代にしかできないような「遊び」的活動まで―を両立させてきたのかを提示できない

---

[1] 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院　修士課程
[2] 総合理系、総合文系として理・文系の区別はある。しかし多少制限はあるものの、他系移行として別の系の学部へ移行することも可能である。
[3] 例えば、工学部では学部独自の運動会が行われているといった学部行事的情報やその学部独自のサークルの存在等。
[4] もちろん総合入試学生による学部選択だけでなく、学部別入試による一年生の学科分属や特に分属等のない学生の今後の生活準備に資することも意図している。

か、というのが本活動の目的としてまず挙げられる。そしてその中で相談に来る学生が「自分が想定している以外の大学生活のあり方」に触れ、大学生活そのものの多様な在り方を感じてくれることを考えた。

２.「両立」で「立つ」もの

しかしながら一方で、ピア・サポート活動の中で両立できるかと悩む多くの一年生からの相談を受けている実感として、そこで両立―二つの物事が同時に支障なく成り立つ―されるものが、そもそもちゃんと「立っている」のかという疑問を感じた。すなわちサークル・部活・アルバイト等と両立されるべき学業・研究が、そもそもしっかりと学生生活の中に確立されているのか、という疑問である。もちろん今年度の一年生は、学部への振り分けが一年生の時の成績の結果算出される移行点によるからか、これまでになく非常に熱心に勉強に励んでいるように見受けられた。ただ一方で、本報告書第５章において例示されているように、その学部移行後の学業・研究については大丈夫だろうかと思うところがあったのである。

そもそも総合入試制度の導入の目的として挙げられているのが、「未成熟な学部・学科選択によるミスマッチの解消」や「学内分野の細分化・融合化への対応」である。しかしながらやはり相談を受けている実感として、入学前から前からほとんど志望学部は決まっており、あまりこれらの目的は果たされていないのではないかと感じられるのである[5]。もちろん大学における学問・研究分野の多様性とその学部にとらわれないあり方などは、北海道大学アカデミックサポートセンターの製作した『アカデミック・マップ 2011』などの広報冊子やアカデミックサポートセンターでの進路相談・各種ガイダンス等でも、学生に伝えられているのであるが、やはりそれはすべての学生に浸透しきってはいないのではないか。2011 年 9 月に行われた総合入試入学者の第一回志望調査[6]では、一学期の成績が出た段階での調査結果が出ているが、倍率等を見てもこれまでの入試における倍率と大差がないように思われる。

もちろんこれまでピア・サポートに寄せられた相談において、学部の情報を求めるものは多数あった。実際に第 2 回ピアカフェに際に収集したアンケート[7]には、学部・学科やコース・講座・研究室やその学部生としてのゴールである卒業論文・卒業研究などの情報を求める声は多い。

そのような状況の中で我々ピア・サポートも「つながり」の組織として、一年生がよりその人に適した学部とつながるために、もっと我々にできることがあるのではないかと思われる。やはり、それは学生自身の研究活動や研究室などでの生活の情報を提示することだろう。学生自身の研究活動を通して、学問・研究そのものの多様性を提示していけるの

---

[5] ただその決定も本報告書第５章 3.2 例 2 のようなケースが多いのではないかと感じている。
[6] 『北海道大学高等教育推進機構アカデミック・サポートセンターニュース』第 2 号参照。http://asc.high.hokudai.ac.jp/office/news/asc_news02.pdf よりダウンロード可。
[7] 本報告書第６章 4.2 参照

ではないか。これが本企画のもう一つの目的である。

こうして学生生活の多様性と学問の多様性を知ることで、大学生活―さらにその後―の可能性を提示することができるのではないか、と考えたのである。

３.「集める」―「かまじい化」へ

これらの情報は、その情報を持つ学生本人の口から語られることが最も理想であり、受け取る者にとっても有効であろう。しかしながら現状北海道大学ピア・サポートでは、そのサポーターの所属学部[8]ですべての学部をカバーすることもままならない状況である。学部ごとならまだしも、学科、研究室単位にサポーターを集めることは今後も難しく不可能に近いと思われる。また、来年度は多数の現サポーターの卒業・修了と公募によるサポーターの新規加入によって、大幅にサポーターの年齢・学年が若返る予定である。サポーター自身の個人的体験のみで語ることは非常に難しい。

また、もちろんその「多様さ」を示すためにも、より幅広い学生たちからの情報を集めることが重要である。それがまさに本報告書第２章 3.3 で示された「かまモン化」の「かまじい化」の大きなポイントである。そのため、現在行われている第 3 回本活では、特に本を持って来ていただけるであろう卒業生を主なターゲットに、その大学生生活の情報を収集することが企画の大きな目的の一つとなっている（本報告書第８章参照)。その他個人的人脈など様々なルートから情報提供を募っている。

こうして集めた情報は、今のところピア・サポート版学生便覧として、一つ(あるいは学部ごと)の冊子にまとめる予定である。主に昨年末から今年に入っての活動であったため、今年度の一年生の学部選択には供することはできなかったが、もうすぐ入学を迎える来年度の一年生の学部選択にはぜひ役立つものを用意したいと考えている。もちろんその後も通常業務の一環として更なる情報アーカイヴの拡充も進めていきたい。

４．さいごに―「語る」ことと「メタモン化」

しかし、ピア・サポート版学生便覧を作ったとして、ただそれを閲覧に供するだけでいいのか、我々はいかにして来室した学生と関わり、つながるのかという意見も出ている。

やはり学生の立場による学生支援としてのピア・サポートとしては、直接のコミュニケーションによって情報を提示するとともに、さらにその学生の話を聴くことが重要だと思われる。確かにそのコンテンツは同一だとしてもそれを「誰が」語るか―「何を」語るかと同様に「誰が」語るか―が重要なのである。そこにピア・サポートの「ピア」・サポートとしての活動の意義があるように思われる。

そしてそれはまた「かまモン化」の内、特に「メタモン化」の部分に大いに関係する。ピア・サポート版学生便覧をツールとして活用し、学生に対応することで、「学生生活における可能性と多様性の提示」への第一歩として、これからも議論を深めるとともに、活動していきたい。

---

[8] 大学院生のサポーターの元の学部を含めてもカバーされない。